

ニアック ニュースレター

NIAC

News Letter

2015

No. 122

巻頭言

内閣府沖縄総合事務局
経済産業部長

牧野 守邦

沖縄のポテンシャルの具現化を目指して
- 沖縄企業経営ルネッサンス -



ディアマンテス

城間 アルベルト

ウチナーンチュは
国際人としての感覚を持っている

一般財団法人 南西地域産業活性化センター



通し池（下地島） （とおりにけ）

その名の通り、地下でつながる二つの池は「見透しの聖地」や「世界のすべてを見透す龍の目」ともいわれ、池の色がアクアブルーや群青など、季節や時間帯によって変化します。国の名勝及び、天然記念物に指定されており、海側の池は洞窟を通じて海にもつながっています。

撮影：仲程長治

NIAC

News Letter

Nansei shoto Industrial Advancement Center

contents

巻頭言 >>>

牧野 守邦 氏（内閣府沖縄総合事務局 経済産業部長）…………… 01

事業紹介 / 活動報告 >>>

新産業集積創出基盤構築支援事業「沖縄国際ハブクラスター形成推進事業」…………… 02

開催報告 >>>

沖縄県受託事業「高度 IT 人材育成拠点形成推進事業」産学 IT 人材育成セミナーの開催 …… 04

沖縄県受託事業「高度 IT 人材育成拠点形成推進事業」シンポジウムの開催…………… 05

事業報告 >>>

沖縄県受託事業「沖縄 21 世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」
～「沖縄 21 世紀国際交流基本戦略」の作成～…………… 06

コラム >>>

海洋都市構想の人材育成～オーストラリアの取り組み～…………… 07

クローズアップ >>>

城間 アルベルト 氏（ディアマンテス）…………… 08

コラム >>>

こっそりと経済セミナー⑥～経済センサス～…………… 11

開催報告 >>>

平成 26 年度 第 4 回理事会・第 3 回評議員会の開催…………… 12

産学官交流サロン（平成 26 年 12 月、平成 27 年 1 月、3 月）…………… 13

事務局ダイアリー >>>

活動状況（平成 26 年 12 月～平成 27 年 3 月）・賛助会員募集の案内…………… 14

巻頭言

沖縄のポテンシャルの 具現化を目指して -沖縄企業経営ルネッサンス-

内閣府沖縄総合事務局
経済産業部長 ^{まきの もりくに} 牧野 守邦



これまで幾つかの経済産業政策等に携わってきましたが、沖縄振興関連の政策に関わるのは、昨年7月の本職への着任が初めてになります。沖縄に来てまず感じたことは、比類なきポテンシャルの高さです。多様な分野の高いポテンシャルは、「沖縄成長産業戦略」や「沖縄21世紀ビジョン」等の計画に反映されています。しかし、県民所得の低さや失業率等の高さはいまだにワーストワンであると知り、大変驚きました。こんなに高いポテンシャルがありながら何故？この疑問は一筋縄では解けません。このポテンシャルを絵に描いた餅に終わらずに、一つでも二つでも、実体経済の中に具現化していくのが自分の使命ではないかと思ったりもします。

この課題には、沖縄の経済社会が復帰後に築き上げてきた、社会経済的な構造問題が関係しています。そのような構造問題の主因は、いわゆる「物流障壁」による「市場への参入障壁」と思われます。障壁は経済活動上双方向に機能しており、沖縄の多くの企業に対し、その経済活動の範囲を140万人の沖縄市場に押し込めてきました。同時に、沖縄の小規模な市場を本土の大企業等から守ってききました。しかし、市場障壁が生み出す閉ざされた環境だけでは、努力しても、結果としてパイの奪い合いや足の引っ張り合いが生じることになります。沖縄経済の発展のためには、企業の誘致もさることながら、沖縄における地域の企業が成長・発展していく必要があり、新たな市場の開拓が必要です。オンリーワンの技術やナンバーワンのサービスを提供できる幾つかの企業が、既に本土の市場を開拓してきました。近年、経済活動のグローバル化の進展と、グローバル経済の成長の中心がアジアにシフトしたことを踏まえれば、これからはもっと大きなアジアの市場を開拓していく可能性が、沖縄の企業の目の前には広がっていると思われます。しかし、狭い市場に押し込められてきた沖縄の多くの企業経営者にとって、このような発想はまさに「コペルニクス的転回」であって、現状からは想像もつかない、かけ離れた経営方針のように思えるかもしれません。けれども、うちなんちゅの先人達が、琉球王朝以来それぞれの時代を切り開いてきた高い精神性は、「ちゃ

んぷる一文化」よろしく、当時の最先端の技術や文化を取り入れて自ら加工し、付加価値を高めて海外に提供するという、大変ダイナミックなものだったのではないのでしょうか。今まさに、沖縄の企業経営者には、「経営ルネッサンス」とでも言うべき経営方針の転換、いやむしろ、本来のうちな一的な企業経営の発想への回帰が求められているのかもしれない。

「貨物を九州に送るよりは、台湾に送った方が早いし安い。」こんな沖縄の特徴は今更言うまでもなく、また、NIAC・ニュースレター前号の巻頭言が台北駐日経済文化代表処那覇分処の蘇処長であることから明らかなおと、沖縄と台湾の交流は、大変緊密に行われてきました。昨年8月にNIACが主催した第15回沖縄・台湾フォーラムもその一つです。同フォーラムの懇親会で李嘉進亜東関係協会会長と、沖・台間で今後、産業交流を進めませんか懇談させていただいたところ、自分も交流を深めるべき分野は産業だと思っているとのことでした。そこで、上京の折に交流協会を訪ねて沖・台間の産業交流に支援を求め、台北駐日経済文化代表処の余副代表を訪ねて沖縄と台湾の企業の連携を進めたいと申し入れました。また、琉球台湾商工協会の新垣会長にも、産業交流に向けて大変お知恵とお力をお借りしております。

沖縄の企業が「メイドインジャパン」の名の下にオンリーワンの技術やサービスを提供し、台湾の企業がアジア華僑のビジネスネットワークを提供する。これからは、沖縄と台湾の企業の経営者同士が、対等の立場でアジア市場の開拓に向けて、ジョイントベンチャーやコンソーシアムを組んで協働していく時代ではないかと思えます。本年2月に交流協会等により沖縄で開催された台湾ビジネスセミナーでは、沖縄と台湾双方の工業界が連携して、ジョイントベンチャー等の実現に向けた体制作りを目指していくとの方角性を、余副代表と共に打ち出しました。NIACを始め、関係機関の御協力を得て、沖縄県工業連合会が、新たな時代のものづくり企業経営者の集まりにふさわしい活動を、今後一層活性化していくことが期待されます。当経済産業部もその実現に向けて最大限努力してまいります。



新産業集積創出基盤構築支援事業「沖縄国際ハブクラスター形成推進事業」

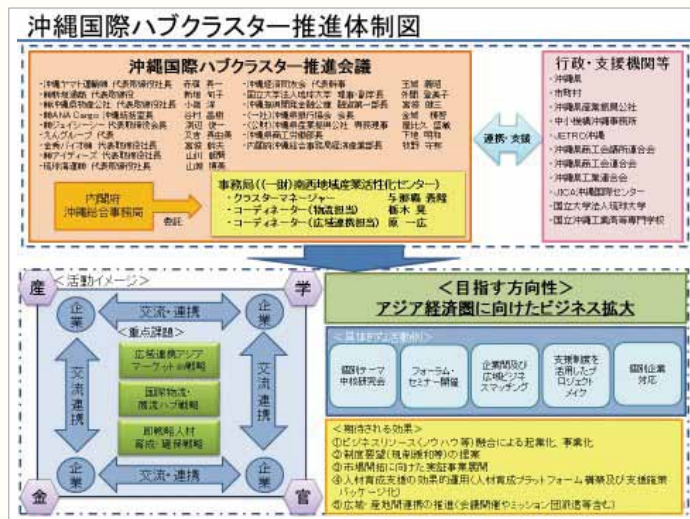
沖縄がアジアゲートウェイとなることを目指した沖縄国際ハブクラスター形成推進事業の第3回推進会議が平成27年3月20日（金）に開催され、平成26年度の活動報告が行われるとともに、沖縄国際ハブクラスター活動のさらなる深化・発展に向けた平成27年度活動計画が報告された。

事業の概要

当財団では、平成26年度、経済産業省より委託を受け新産業集積創出基盤構築支援事業「沖縄国際ハブクラスター形成推進事業」を実施した。この事業は、産学金官のネットワークによる「沖縄国際ハブクラスター」を形成することで、アジア市場に向けてビジネスを展開する企業を支援することを目的としたものである。

平成26年度の沖縄国際ハブクラスター活動は、アプローチ先のニーズを把握しつつ、広域連携による付加価値の高い商品提供につなげる「広域連携アジアマーケットin」、沖縄を拠点とした空・海の物流の拡大と円滑な商取引につなげる「国際物流・商流ハブ構築」、海外展開ビジネスの担い手育成につなげる「海外展開人材育成・確保」を重点戦略と位置づけ、その中で個別の課題やニーズに合わせた中核研究会による取組みの深堀やセミナーの開催を行った。

この活動の実施にあたっては、アジアビジネスの担い手企業を中心に構成された推進会議を設置（議長：玉城義昭 沖縄経済同友会代表幹事）し、活動全体の方向性等に係る協議を行い、さらに個別の活動にはクラスターマネージャー、コーディネーターを配置して活動を支援してきた。



第3回 沖縄国際ハブクラスター推進会議の開催

平成27年3月20日（金）に第3回沖縄国際ハブクラスター推進会議が開催された。会議では、始めに沖縄国際ハブクラスターの平成26年度活動報告が行われ、続いて平成27年度の活動計画（案）が示された。その後、参画企業等からの海外展開に向けた現状の取組の報告、委員による意見交換が行われた。

(1) 平成26年度活動報告

「広域連携アジアマーケットin」、「国際物流・商流ハブ構築」、「海外展開人材育成・確保」の3つの重点戦略に基づいて実施された今年度の取組について事務局から報告が行われた。また、クラ



スターマネージャー、コーディネーターより個別活動の報告が行われた。クラスターマネージャーからは、個別企業支援の成果として、米飯メーカーと加工食品メーカーとのマッチングによる電子レンジ対応商品の開発や台湾のテーマパークにおける沖縄観光物産の常設販売コーナーの設置などが報告された。レンジ対応商品の開発や台湾のテーマパークにおける沖縄観光物産の常設販売コーナーの設置などが報告された。



クラスターマネージャー・コーディネーター活動報告の様子



沖縄国際ハブクラスター推進会議 会議風景

(2) 平成 27 年度活動計画 (案)

平成 26 年度のクラスター活動を踏まえて、クラスターネットワーク参画企業等の取組を有機的に連携し、3つの重点戦略を深化・発展させるための次年度の活動計画(案)が報告された。

主な取組として、①広域連携アジアマーケットINでは、全国の物産を沖縄に集め、ジャパンブランドとしてブランディングし、アジアへ展開するための仕組みの構築等に取り組む。また、訪日外国人観光客の購入記録を集約・分析することで得られる消費動向を、海外市場展開に向けた商品開発や販売戦略等につなげるためのシステム構築について検討を行う。

②国際物流・商流ハブ戦略では、海外対応型食品加工の技術力・企画力向上による高付加価値化や国際海上物流の商流拡大に向けて、プロジェクトチームを設置するなど具体的な取組を行う。③海外展開人材育成・確保戦略では、グローバル人材プラットフォーム会議へ参画し、戦略的な人材育成のための情報共有や施策連携を図る。また、商談スキルマニュアルの作成やセミナーの開催等商談スキル向上に向けた取組を行う。

(3) 意見交換

委員による意見交換では、アジアでは日本各地の産品、ブランド品が集まり差別化が困難になる中、「安心・安全の付加価値をつけていくことが重要ではないか」、「今後はただモノの保管・通過だけでなく、IT等を駆使して沖縄の物流センターの価値を高めていくフェーズに入っていく」など沖縄で付加価値を高めていくことの重要性を指摘する意見や、「沖縄が食品輸出のゲートウェイとなるためには、各種の検査機関等インフラ面での整備が必要」、「沖縄国際物流ハブの取組や現状をもっと発信して、優秀な人が沖縄に集まるようにしなければならない」といった課題が挙げられた。

(文責:企画研究部 喜納 悠太)



沖縄県受託事業「高度IT人材育成拠点形成推進事業」 産学IT人材育成セミナーの開催

沖縄県における高度IT人材の育成・確保に向けて、企業と学術機関の双方の人材育成の在り方を考えることを目的に、IT人材の育成における現状の取組や課題、将来像等についてゲスト講師を迎え、「産学IT人材育成セミナー」を開催した。

当財団で実施している沖縄県受託事業「高度IT人材育成拠点形成連携推進事業」の一環として、1月13日（火）14時より、ロワジュールホテル&スパタワー那覇において、「産学IT人材育成セミナー」を開催した。

今回、企業と学術機関の双方における人材育成の在り方をテーマに、全国において産学連携を通じたIT人材育成の取組を推進しているNPO法人高度情報通信人材育成センター（CeFIL）理事・事務局長の菊池純男氏（株式会社日立製作所）、また、県内において高付加価値IT人材の育成・確保を推進している一般社団法人沖縄オープンラボラトリ副事務局長の高澤真治氏のお二人を講師に迎え、産学連携におけるIT人材育成の在り方や沖縄県におけるIT人材育成の期待等について、講演と会場との意見交換を行った。

講演1: 産学連携におけるIT人材育成の在り方について

講師 NPO法人高度情報通信人材育成センター 菊池 純男 氏
(CeFIL) 理事・事務局長 (株式会社日立製作所)

講演Iでは、CeFILの事務局長を務める菊池氏より、CeFILによるIT人材育成の取組や、自身の国家プロジェクト参画経験、筑波大学大学院教授赴任の経験を踏まえた産学連携におけるIT人材育成の課題や展望について講演頂いた。



講演2: 沖縄におけるIT人材育成への期待

講師 一般社団法人 沖縄オープンラボラトリ 高澤 真治 氏
副事務局長

講演IIでは、沖縄オープンラボラトリ副事務局長を務める高澤氏より、県内のIT人材育成の現状や課題が挙げられ、今後の人材育成として「新規ビジネスの創出の為の人材育成」、「尖った人材の育成」、「チャレンジ精神の醸成」、「定量化・可視化した評価」への期待等について講演頂いた。



会場からの質疑応答・意見交換

講演後、会場より質疑応答ならびに意見交換の時間を設けた。会場からは、「尖った人材」の育成手法における課題点、小中学生等に対するIT人材育成の重要性や課題点など、活発な意見交換が行われた。



(文責: 調査第2部 與那覇 徹也)

沖縄県受託事業「高度IT人材育成拠点形成推進事業」 シンポジウム「高度IT人材育成拠点の形成に向けて」の開催

沖縄県における高度IT人材拠点の形成に向けた取組を広く周知するとともに、拠点形成への理解を深めることを目的としたシンポジウムを開催し、高度IT人材育成の動向やあり方について、本事業有識者委員会委員から2名による講演、ならびに事務局より事業報告を行った。

当財団で実施している沖縄県受託事業「高度IT人材育成拠点形成連携推進事業」の一環として、2月12日(木)、沖縄かりゆしアーバンリゾート・ナハにおいて、シンポジウム「高度IT人材育成拠点の形成に向けて」を開催した。

今回、沖縄県における高度IT人材拠点の形成をテーマに、本事業有識者委員会の委員長であり北海道大学名誉教授の嘉数侑昇氏、また、同じく有識者委員会の委員であり、(一財)リモート・センシング技術センターの常務理事の井上準二氏のお二人を講師に迎え、講演頂くとともに、事務局より当事業の事業報告として、沖縄県における高度IT人材育成拠点の形成に向けた取組等の報告を行った。



講演Ⅰ：沖縄を舞台とする高度IT人材育成システム構築の考察

講師 | 本事業有識者委員会 委員長 嘉数 侑昇 氏
(北海道大学名誉教授)

講演Ⅰでは、本事業有識者委員会の委員長を務める嘉数氏より、国内外における高度IT人材育成の現状や動向、沖縄県における高度IT人材育成システム構築に向けた課題や展望などについて講演頂いた。



講演Ⅱ：これからの「高度IT人材育成」のあり方

講師 | 一般財団法人 リモート・センシング技術センター 常務理事 井上 準二 氏
(本事業有識者委員会委員)

講演Ⅱでは、(一財)リモート・センシング技術センターの常務理事を務める菊池氏より、自身のシリコンバレー赴任や企業経営経験、産業カウンセラー・コンサルタント経験を踏まえた高度IT人材の考察やその人材育成に対する課題や展望について講演頂いた。



事業報告：沖縄県における高度IT人材育成拠点の形成に向けて

報告者 | 一般財団法人 南西地域産業活性化センター 調査第2部長 上江洲 豪 氏
(本事業事務局)

事業報告では、平成26年7月より実施した本事業の事業内容等について、事務局より報告を行った。国内外のIT人材を取り巻く現状から、育成が期待される高度IT人材の人材像を整理し、その人材育成の場として沖縄県の優位性を示すとともに、沖縄県における高度IT人材育成拠点形成の整理・検討等について報告した。



(文責：調査第2部 與那覇 徹也)



沖縄県受託事業「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」 ～「沖縄21世紀国際交流基本戦略」の作成～

沖縄県では「沖縄21世紀ビジョン」の将来像の一つとして「世界に開かれた交流と共生の島の実現」を掲げており、その達成に向けての国際交流・共生に関する取り組みが進められている。

当財団では沖縄県知事公室広報交流課からの委託を受けて、「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」を実施し、同基本戦略の素案をまとめた。

経済のグローバル化や情報通信技術および移動手段の発達に伴い、国際化が進展する時代を迎えている。地球規模で人・モノ・資金・情報等が行き交う現代において、東アジアの中心に位置する等の沖縄の持つ特性は、諸外国・地域との経済、学術、文化、スポーツ等の分野で交流と連携を深めながら、ともに発展していくという取組の中でこそ発揮される。このような趣旨を踏まえて、当財団では沖縄県知事公室広報交流課からの委託を受けて、「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」を実施し、同基本戦略の素案をまとめた。

素案作成に当たっては、有識者会議（委員長：金城宏幸 琉球大学教授）を設置し助言や提案を募った他、国際交流関係機関等へのヒアリングを行い、同基本戦略の素案作成の参考とした。

その後、知事公室広報交流課により、各部局との調整や県民への意向聴取を経て、平成27年4月に同基本戦略が策定された。

同基本戦略は、「沖縄21世紀ビジョン」の目指すべ

き将来像の一つである「世界に開かれた交流と共生の島の実現」の達成に向けて、観光・学術・文化・経済・平和等の多元的交流の加速化促進ならびに世界と共生する社会の形成に向けて、その原動力となる土台・基礎づくりとしての基本戦略を検討している。

その基本施策として、①「ウチナーネットワークの継承・拡大」、②「国際感覚に富む人材育成」、③「多文化共生型社会の構築」、④「国際協力・貢献活動の推進」、⑤「海外への情報発信」の5つを挙げて、それら施策の有機的連携による好循環の創出を図っている（下図参照）。

なお、本戦略の期間は、平成27年度から沖縄21世紀ビジョン基本計画の終了年度にあたる平成33年度までとしている。

※「沖縄県21世紀国際交流基本戦略」の詳細については、沖縄県のホームページ (<http://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kohokoryu/kokusaisenryaku.html>) に掲載されているので、ご参照ください。

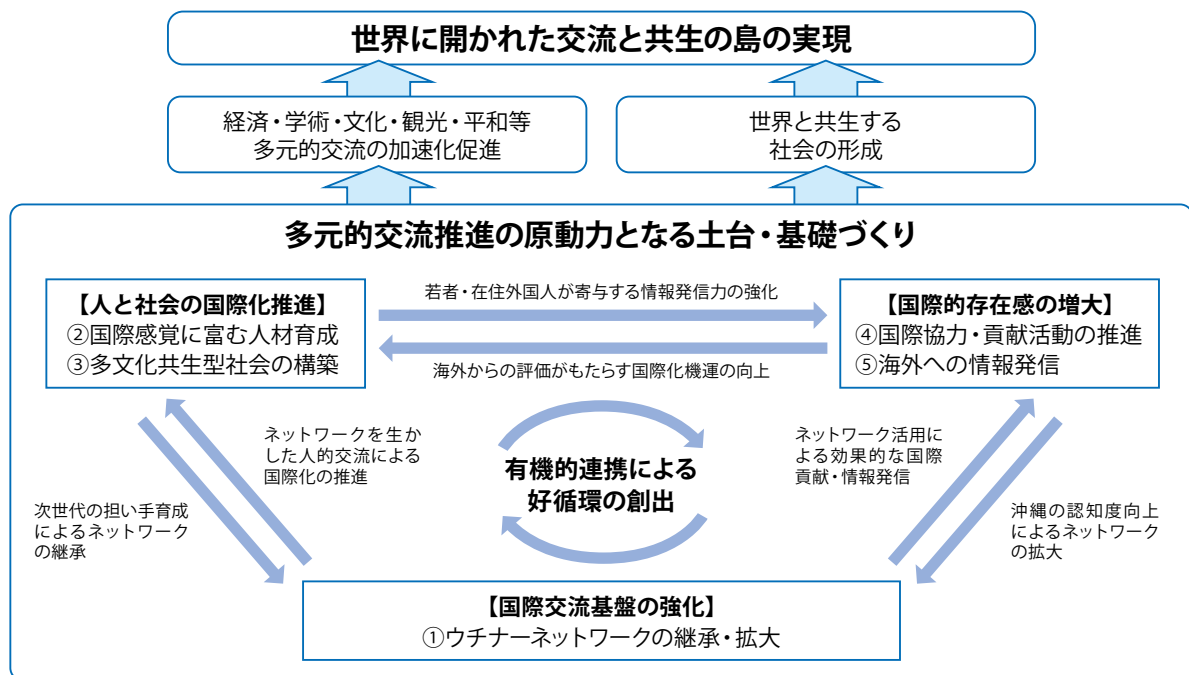


図 沖縄21世紀国際戦略の基本的な考え方のイメージ

(文責：調査第2部 上江洲 豪)

海洋都市構想の人材育成～オーストラリアの取り組み～

海洋を取り巻く環境変化の中で、県内でも海洋都市構築が目指されようとしています。その中の課題の一つである人材育成について、海洋オーストラリアでの取り組みを視察してきました。

近年、海洋を取り巻く環境は著しく変化しています。尖閣諸島などをめぐる周辺諸国との問題からレアアースやメタンハイドレートなどの海底資源開発への期待に至るまで海に対する県民の関心は年々高まりを見せています。昨年度、県では「沖縄における海洋資源利用に向けた海洋都市構築可能性事業調査」が実施されました。当財団では、再委託を受け、課題の一つである人材育成について、国外での取り組みを調査する為、オーストラリアを訪れました。

平成 27 年 2 月初旬、寒緋桜が咲き始めた冬の沖縄を出発しシンガポール経由で約 15 時間の移動後、到着したオーストラリアは湿度約 50% 気温 20℃ の爽やかな夏でした。人口は約 2313 万人、国土は約 769 万 km² で日本の約 20 倍以上あり、また世界第 2 位の広大な EEZ (排他的経済水域) を所有しています。海洋に関する産業には石油・ガス・港湾などの業界があり、経済規模は約 440 億ドルにのびります。

オーストラリア大陸は私にとってコアラとカンガルー、それにグレートバリアリーフなどの海と自然の印象が強くあり、そういった環境の中で子ども達そして一般市民向けにどのような海洋教育、啓蒙活動が行われているのか沖縄にある既存施設との取り組みの違いはどのようなものがあるか等とても興味深いものでした。

まず海洋について学べる公共施設としてシドニーにあるオーストラリア国立海洋博物館の視察を実施しました。同博物館は 1990 年開館しシドニー西部端の観光客と地元民に人気のダーリングハーバー地区に位置しています。視察時は、平日の木曜日でしたが観光客の姿を多くみかけました。館内では、11 箇所の展示スペースが設けられ、海洋探検家と移民による航海の

歴史から最近の湾岸事業他、様々な分野の展示があり、10 階建ほどの大きさのヨットも展示されています。受付の方から「とても人気がありますよ」と教えて頂いたのは、隣接した埠頭に係留しているオーストラリア開国の父キャプテンク



ックのエンデバーのレプリカ船、潜水艦、駆逐艦ヴァンパイア号の艦内見学です。同博物館は未就学の子どもから大学生が年間でおおよそ 3 万 8 千人来場しています。人材育成の取り組みとして、年齢に応じて体験型レクレーションが用意されています。20 数個の教育プログラムとして、進学するごとに海に関する学びが増えていくこと、親しむ機会が継続して設けられていることが特徴的です。

また、同博物館のボランティアの方々も印象的でした。館内と係留している展示の説明をしているのは職員ではなく、博物館内のボランティアの方々です。当博物館はボランティア活動を積極的に導入している為、一般ボランティアの人数が 475 人と博物館職員の 5 倍近くに上ります。ボランティアには専用トレーニングを準備しており、当博物館には成人してもボランティアという形で海に関することを学び続けることができる施設であると感じました。一般市民向けの海洋教育の啓蒙活動といえます。

沖縄にも海に親しむことのできる施設は、本部町にある美ら海水族館、名護市の国際海洋環境情報センター (GODAC) などがあります。また、ビーチクリーンやサンゴ再生プロジェクトなどボランティア活動も積極的に実施されています。沖縄も地域性として海に親しむ環境には恵まれています。オーストラリアの様に、海に携わる企画を幼い子から成人まで持続的に取り組むことで、海の生物、科学の分野から海洋政策や法、経済、安全保障など学際的な海洋教育にまで広がり、今後進展していく海洋都市構築の人材育成につながっていくと考えます。

(文責: 調査第 1 部 具志堅由美)





シリーズ

クローズアップ

Close up

NIAC
News Letter

ALBERTO SHIROMA

ディアマンテス

城間 アルベルト

ウチナンチュは
国際人としての
感覚を持っている

城間アルベルト（しるま あるべると）

- 1966年 ペルー共和国リマ市に生まれる。
- 1986年 歌謡コンクールでの優勝をきっかけに来日。
- 1991年 ディアマンテスを結成。沖縄を拠点に音楽活動を開始する。
- 1993年 1stアルバム「オキナワ・ラディーナ」で全国メジャーデビュー。

これまでに、「ガンバッチャンド」、「勝利の歌」、「片手に三線を」、「琉神マブヤー」など数々のヒット曲を生み出し、全国各地でライブ・コンサート活動を展開する。作詞、作曲、ヴォーカルを担当。楽曲提供や他方面のアーティストとのコラボレーション、県内有数の総合美術展「沖展」グラフィックデザイン部門にて入選・入賞を果たすなど、活動の場を広げている。

2016年の世界のウチナンチュ大会の開催や外国人観光客の増加などを背景に、近年、沖縄県における国際交流の機運が一層高まりつつある。そこで今回、日系ペルー三世として沖縄に移住し、アーティストとして、また沖縄を代表する国際人のフロントランナーとして活躍を続ける城間アルベルト氏に、沖縄県における今後の国際交流の課題や展望について、お話を頂いた。

—まずは、沖縄移住のきっかけや、これまでの活動をお聞かせください。

生まれ育ったのはペルーのリマで、日系三世になります。建築大学の学生のと看、のど自慢大会に出て、優勝のご褒美として日本への航空券をいただきました。ちょうど20歳のときでした。

子どもの時から歌は好きで、14歳から日本の歌謡曲や演歌とかに、惚れてしまって、歌手になるために日本に来たのが1986年12月5日です。

今でもそうですけれど、僕は外国人なのでビザが必要なんです。観光ビザで来たので、3か月で切れてしまう。当時は「日本人配偶者等」という在留資格はなかったんです。僕が来て、2年後ぐらいに、日系人の出稼ぎが増えたということで、一世、二世、三世、いわゆる戸籍で証明できればビザがもらえるようになったんです。

まず、成田でひっかかった。自分は日本人の孫だと思っていたけれど、「あなたはペルー人だよ」と言われた。「書類上は外国人だけど、でも僕は城間だよ」って。当時の僕は、日本語で、自分の気持ちが伝えられない。結局、入管で2時間以上待たされた。歌手に

なるために来たけれど、持っているビザが違うとなると、やはり入管の人は、「うん？」と思うのは当然だね。自分は日本人なのか、ペルー人なのか。これが日本との出会いでした。

—その後、沖縄に移住されたわけですね。

東京でオーディションを受けたりしたけれど、全滅。なんとかビザを作らなければ、と沖縄に来た。ちょうど僕のいところが日本政府から招待されて、琉大で日本語の勉強をしていたので、いろんな方を紹介してくれた。アルバイトしながら、琉球古典音楽を勉強したり、いろいろとやってきたことが認められて、どうにかビザが下りた。

そのうち、沖縄での時間が経てばたつほど、もっとここにいたいな、という気持ちになった。歌いたいなら何を歌うべきなのか。何のために歌うのか、とか。ただ歌が好きだから歌うというのは、ちょっと意味が違うというか、それをこの島で感じ始めていた。もっと大事なことを、まず一人の人間として、もっと深いところから歌を知りたい。答えはすぐは出ないんですけども、この島で何か見つけるであろう、と思い

ましたね。音楽はもちろん楽しいものであるのだけれども、その楽しさのバックに、もっといろんなことがある。辛いことであったり、歴史的なことであったり。音楽を職にすることは、軽い気持ちでできない、ということがわかってきた。

琉球古典音楽は意味がわからないし、正座の習慣がないから足が痛くて、楽しいどころではない。ただビザのためなら何でもがまんするよ、というぐらいの気持ちでやっていました。僕の最初の歌三線の先生は城間徳太郎先生で、のちに人間国宝になる方です。「かぎやで風」はお祝いの歌で、喜びの最高の表現なんだと、先生は一生懸命説明してくれて、とても感動したんだよね。それが沖縄との最初の心の触れ合いというか。生活で必死だし、ビザのことでいつも頭がいっぱいなんだけれど、その中でも、こっちで何かをつかもう、もっともっと知りたい、というか。その時本当におじいちゃんは、こんな素晴らしいところから出たんだって思いましたね。

それと同時に沖縄の現状というか、基地があったりとか、戦争があったこととか、考えさせられることがいっぱいあるんですね。そのギャップがすごいというか。平和を愛するところでもありながら、いつ戦争が起こってもおかしくないような状況にあるという。



—そういう感性と言いますか、感じる、つかむところがあつたんですね。

人生において大切なことは何か、ということのヒントはこの沖縄にある、と本気で思いましたよ。

今、国際化というけれど、ここに国際人がいる、ということがわかったんですよ。この島はそういう感覚を持っている。そのひとつの証が、自分で言うのもなんですが、ダイヤモンドというバンドなんですよ。初期のころの「ガンバッテヤンド」で、みんな楽しく踊っているし、意味はわからなくても一緒に歌っていたし、「あっ、国際人というのは、こういうことかな」と。なんでも取り入れてものにします。表現する。

ダイヤモンドのメンバーは、みんながペルー人じゃない。ウチナーンチュもいる。91年に出会った

メンバーでやってみよう、ということになった。デビュー当時、オリジナル曲は数えるほどしかなくて、あとはカバー曲で埋めた。だから自然にその時代に合ったというか、必要とされたという大げさかも知れないけれど、あの頃のことを思うと、ダイヤモンドはウチナーンチュの手で、みんなでできたものだと思いますね。たまたま僕は歌っていた。

—そのダイヤモンドが、沖縄ブームの走りとなりました。

中央に出なければ、音楽は成功しない、というのを破ったのはダイヤモンドですね。地元でこだわったのが、ダイヤモンドだと思いますね。90年代って確かに面白いと思うね。僕らは本当に地元でこだわりたい、というのがありました。

—有名になった後も沖縄にこだわり続けていますよね。例えば琉神マブヤーの音楽を作ったり。

僕に話を持ってきたのは玉城満さんでしたね。こんな企画あるんだけど、みんなで作ろうって。金はないけどって（笑）。作ったのはパーシャクラブの土地（正昭）さんです。最初から歌はアルベルトというイメージがあつたらしい。みんなで、売れる売れないはわからないって感じでした。でもその気持ちは大事だよ。その気持ちがあつたからヒットしたんでしょう。みんなの気持ちが一つになったと思うんですよ。

今までの活動を振り返ってみると、やはり最初の決断が間違いではなかった。一緒に歩いていこう、というか、もっと沖縄を元気にしていこう、世の中を変えよう、というぐらいの勢いで僕らは最初からやっていたと思うんですね。20代の青年がこぶしを上げる、というイメージでしたね。少なくとも僕の中にはいつもあつた。もちろん優しい歌も歌うけれど、それでもこぶしを上げている。「片手に三線を」という曲を作りましたが、それは僕らの活動の中で、一つの大きな原点ではあります。大事なものは、ここ。ここに立ってやることだと思いますね。

—沖縄21世紀ビジョンで、沖縄県の将来像として「世界に開かれた交流と共生の島」の実現が掲げられています。国際交流の充実に向けて、どのような取り組みが必要だと感じますか。

英語教育がとても必要だと思います。これにぜひ力を入れてほしいですね。日本語をしゃべるのはこの国だけですからね。

平和な時代だからこそできることがある。今ここは平和だけれど、いつなにが起きるかわからないの

なら、やっぱり努力すべきじゃないですか。今できることって何なのか。勉強することだったり、いろいろ努力するべきだと思う。

僕は日本に来たとき、言葉の力というのを、すごく感じたね。演歌歌手になりたい、とちゃんと説明できないから2時間も座らされる。怪しいと思われる。言葉の壁なんですよ。沖縄も、日本もそうなんですけれど、これだけ恵まれているのだから、英語ぐらいしゃべれるでしょう、って世界の子もたちは思っているはずですよ。この島にあるすべてのものを使って努力するべきだと思う。

—ディアマンテス自体もそこにあるものをフル活用して、努力されてきたわけなんですね。

基本的に、ディアマンテスに関しては、楽しさが伝わればいい、というのが強いんですね。楽しくするために努力します。やっぱり常にいろんなものを見て、外のものを見て、世の中に何が必要なのか、今どんなメッセージを送るべきなのかを考えますね。1996年に県民投票（米軍基地の整理・縮小と日米地位協定の見直しについて）がありましたね。その時に、僕らはたまたま普天間基地内のフェスティバルで歌う予定だったんですよ。あの状況の中で、すごく非難されたけれど、僕らはちゃんと歌ったんです。政治的なことで、音楽に線を引かれたら困るよ、という気持ちでした。音楽は人を差別する道具ではない。県民投票は応援しましたが、普天間基地のフェスティバルでは歌わない、などと感情的になったら、すごく危険なことですよ。

常に人と人との交流はとても大事だと思う。彼ら（米軍人）だって悩むんだよ。今はこれが仕事で、やらなければいけないことがある。でもいつか軍服を脱いで、平和な暮らしをしたいと願っている人たちの方が多いと思う。普通に沖縄が好きの人たちがいっぱいいるはずですよ。

— 2016年はウチナーンチュ大会の開催年でもあります。このイベントについて、どのようなことを期待されますか。

ただのお祭り騒ぎにするのは、もったいない。もっと活用すべきなんでしょうし、若い子たちの目を世界に向けさせるチャンスにしてほしい。前回の大会に参加した若い子たちが、それを受け継いでいろいろやっています。

— その後に東京オリンピックも控えていて、日本中に世界の人が集まります。それに向けて、どのような取り組みが必要だと感じますか。



日本はやはり注目されていますよ。大震災もあった。それを乗り越えてのオリンピック開催というのは、意味がある大会だと思いますね。子どもたちに、自分たちにもチャンスがあるということをもっとアピールしてほしいですね。

— 世界中の人たちが集まるわけですから、そこでもかしら沖縄をアピールできないかなと。例えば城間さんが君が代を歌われるとか。

（笑）なるほどね、それは喜んで。「君が代」は、子どものときにペルーで歌ったしね。ペルーではペルーの国歌もそうだけど、日系人は何かあると集まって「君が代」を歌うんだよ。二つの国歌をちゃんと歌えるというのは平和だからできるんですよ。

— 最後に、外国人観光客もどんどん増えています。国際交流をもっと活発化させるために、沖縄にどういったことを期待しますか。

スペイン語で、パスという言葉がある。英語のピースです。その言葉は、僕が子どものとき、常に教育の中にはあった。それがあったから、外に目を向けることが出来たんじゃないかと思う。人とコミュニケーションが取れば、仲良くなれる、みたいな、そうなる国際感覚が育つと思う。何のための国際感覚なのか、何のための英語なのか、やっぱり仲良くするためにあると思います。そのためにウチナーンチュ大会もあるし、そのためにオリンピックもある。

平和というのは、生活が楽しい。勉強したいものを勉強できる。子どもが遊びたい場所で遊べる。のびのびと生きる。そういうことですよ。好きな歌を歌えることもそうです。

— 本日はありがとうございました。

（聞き手：調査第2部）

こっそりと
経済セミナー

6

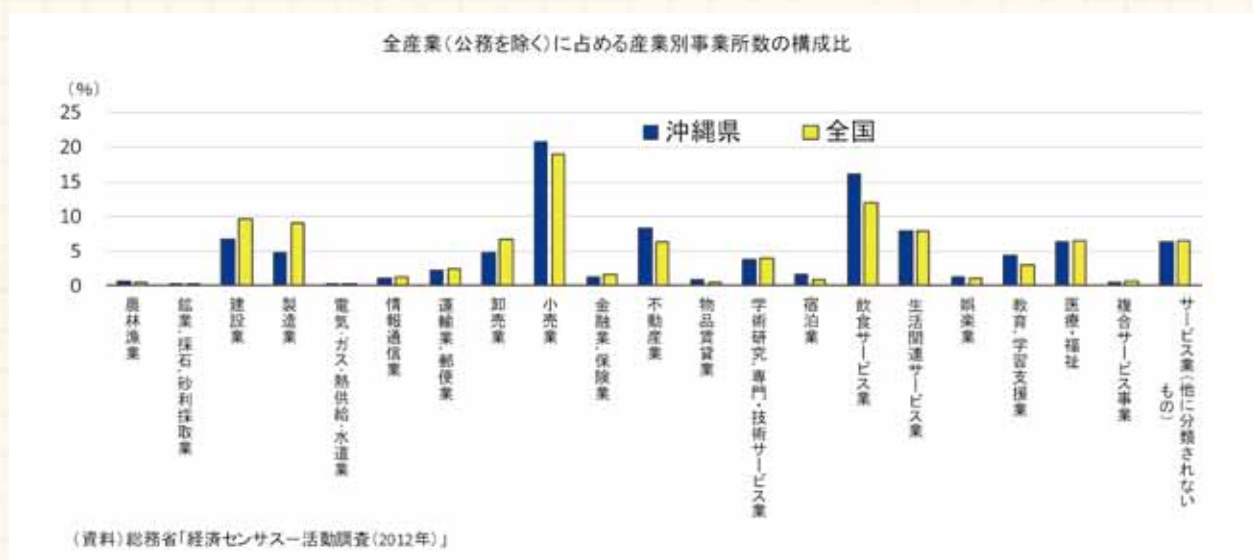
新聞や経済誌などでよく見かける経済用語。なんとなく分かっているけど説明できない。そんなちょっと難しい経済用語について、こっそりと教えます。



経済センサス

今回は、我が国の産業を包括的に調査する「経済センサス」について解説します。これまで、我が国では産業を対象とする大規模な統計調査は、産業分野ごとに各府省がそれぞれ異なる年次および周期で実施してきました。このため、同一時点における産業全体の包括的な基本統計が作成できないという問題が生じていました。また、経済に占める第3次産業の割合が高くなっているものの、サービス分野の統計が不足していました。このため、国全体の包括的な経済統計であるGDP推計の精度を上げるためにも、全産業をカバーする大規模な基本統計を整備する必要性が指摘され、2005年の経済財政諮問会議において、経済活動を同一時点で網羅的に把握する「経済センサス」の実施が提言されました。これに基づき、各府省において経済に関連した大規模統計調査の統廃合、簡素・合理化が行われ、従来の「事業所・企業統計調査」や「サービス業基本調査」などに替わって、2009年に第1回の「経済センサスー基礎調査」が実施され、12年に「経済センサスー活動調査」が実施されました。また14年には第

2回の基礎調査が実施されています。基礎調査は、すべての産業における事業所および企業の従業員規模等の基本的情報を全国、地域別に明らかにするとともに、各種統計調査の基礎となる母集団情報を提供することを目的としています。また、活動調査は売上高や費用等の経理項目の把握に重点を置いています。すべての事業所、企業が対象となるため「経済の国勢調査」といえます。経済センサスの調査結果は、GDP推計などの基礎資料や各統計調査の母集団情報として、また各自治体への消費税や補助金の交付、地域振興などの基礎資料として国、都道府県、市町村で活用されるほか、マーケティングや調査・学術研究などの基礎資料として民間企業や研究機関などで幅広く活用できます。経済センサスにより、国や都道府県、市町村の産業構造や事業所規模の分布、売上や費用構成（国、都道府県）など有用で精度の高い情報が得られるようになり、また、調査回数を重ねていくことで産業構造や各産業に属する企業の経営指標の変化なども把握できるようになります。



(文責: 上席研究員 金城 毅)

平成26年度

第4回 理事会**第3回評議員会の開催**

平成26年度第4回理事会が平成27年3月19日(木)、第3回評議員会が3月26日(木)に開催され、それぞれ審議が行われ承認されました。

【第4回理事会】**1. 平成27年度事業計画書・収支予算書(案)**

- (1) 経済・社会に関する調査・分析 2件
- (2) 産業の活性化プロジェクトの発掘・推進 2件
- (3) 技術開発・振興等マネジメント 3件
- (4) 普及啓発 3件

2. 顧問の推薦(案)

武田 修三郎(京都大学 特任教授) (再任: 非常勤)

富川 盛武(沖縄国際大学 産業情報学部 教授) (再任: 非常勤)

3. 平成26年度第3回評議員会の開催日時・場所及び議案(案)**【第3回評議員会】****1. 平成27年度事業計画書・収支予算書(案)**

- (1) 経済・社会に関する調査・分析 2件
- (2) 産業の活性化プロジェクトの発掘・推進 2件
- (3) 技術開発・振興等マネジメント 3件
- (4) 普及啓発 3件

2. 理事の選任(案)

(文責: 総務部 城間立)

産学官 交流サロン

(平成26年12月、平成27年1・3月)

当財団では、産学官が気軽に集まって交流する産学官交流サロンを適時開催している。サロンでは毎回、講師を招いて20分程度の講話を頂き、その後気軽なスタイルで懇談、交流している。平成26年12月、平成27年1、3月に開催されたサロンのトピックス概要を以下にご紹介する。

今回の産学官交流サロンの案内や、過去の開催内容の概要は以下のサイトに記載されている。
<http://www.niac.or.jp/katudo6.htm>

平成26年
12月

日時：平成26年12月16日(火) 18:30～20:30
場所：(一財)南西地域産業活性化センター 大会議室
トピックス：「数字で振り返る2014年の沖縄経済」

講師：沖縄総合事務局 次長 **田中 愛智朗** 氏

【概略】

2014年は消費税率が引き上げられ、社会・経済面でインパクトのある年となった。12月サロンには沖縄総合事務局の田中次長を迎え、2014年沖縄を数字で振り返って頂いた。入域観光客や、30人以上の企業での常用雇用の大幅増のような良い数字の裏に隠れた高校進学率の低さと若年失業率の高さは、一括交付金を教育・福祉にも使用して改善しようと締められた。



平成27年
1月

日時：平成27年1月27日(火) 18:30～20:30
場所：(一財)南西地域産業活性化センター 大会議室
トピックス：「昨年の沖縄大交易会を振り返って」

講師：沖縄懇話会 国際商談会
「沖縄大交易会」運営実行委員会 事務局長 **安里 昌利** 氏

【概略】

1月サロンは、平成26年11月27日28日の両日、沖縄コンベンションセンターで開催された「第1回沖縄大交易会」について、運営実行委員会事務局長の安里氏に振り返って頂いた。県内86社を含む約200社のサプライヤーと、国内・海外から約160社のバイヤーが参加し、サプライヤー側の約1,700件の商談中、約270件の成約等の成果を収め今後に期待が寄せられた。



平成27年
3月

日時：平成27年3月24日(火) 18:30～20:30
場所：(一財)南西地域産業活性化センター 大会議室
トピックス：「沖縄におけるスーパートレーニングセンター（仮称）構想」

講師：元プロラグビー選手 **福永 昇三** 氏

【概略】

福永氏は、「三洋電機（現・パナソニック）ワイルドナッツ」の初代主将を務めた元プロラグビー選手である。3月サロンは同氏をお呼びし、スーパートレーニングセンター（仮称）構想についてお話し頂いた。プロスポーツ選手の引退後に経験が活かせる場所、また若い世代の可能性のため、IMG アカデミーに類する施設を暖かい沖縄に設置したいと語られた。



(文責：企画研究部 赤嶺進也)

事務局ダイアリー

活動状況 (平成26年12月～平成27年3月)

平成26年 12月 ● December

- 1日 「知的・産業クラスター形成推進事業」国際シンポジウム
- 2日 「知的・産業クラスター形成推進事業」第1回推進会議
- 5日 「スマートエネルギーアイランド基盤構築」第3回再生可能エネルギー部会
- 5日 「海洋資源利用と支援拠点形成に向けた可能性調査事業」シンポジウム
- 12日 「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」第1回有識者会議
- 15日 「医療基盤活用型クラスター形成支援事業」第3回WG
- 16日 産学官交流サロン
- 18日 「アジアゲートウェイとしての発展に向けた市場動向調査」第1回物流機能WG
- 19日 「アジアゲートウェイとしての発展に向けた市場動向調査」第1回セントラルキッチンWG
- 26日 仕事納め

- 29日 「知的・産業クラスター形成推進事業」第2回沖縄国際ハブクラスター連絡推進会議

2月 ● February

- 5日 「アジアゲートウェイとしての発展に向けた市場動向調査」第2回セントラルキッチン研究会
- 6日 「高度IT人材育成拠点形成連携推進事業」第5回委員会
- 12日 「高度IT人材育成拠点形成連携推進事業」シンポジウム
- 13日 「スマートエネルギーアイランド基盤構築」第3回亜熱帯型省エネ住宅部会
- 16日 「医療基盤活用型クラスター形成支援事業」第5回WG
- 17日 「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」第3回有識者会議
- 27日 「知的・産業クラスター形成推進事業」第3回プラットフォーム会議

3月 ● March

- 13日 「スマートエネルギーアイランド基盤構築」第4回亜熱帯型省エネ住宅部会、第4回再生可能エネルギー部会
- 13日 「医療基盤活用型クラスター形成支援事業」委員会
- 16日 「重粒子線治療施設設置基本構想策定業務」第2回委員会
- 16日 「医療基盤活用型クラスター形成支援事業」第6回WG
- 17日 「海洋資源利用と支援拠点形成に向けた可能性調査」第2回委員会
- 19日 第4回理事会
- 20日 「知的・産業クラスター形成推進事業」第3回沖縄国際ハブクラスター連絡推進会議
- 24日 産学官交流サロン
- 25日 「沖縄県観光推進ロードマップ策定事業」第4回沖縄観光推進戦略会議
- 26日 第3回評議員会

平成27年 1月 ● January

- 5日 仕事始め
- 13日 「高度IT人材育成拠点形成連携推進事業」産学IT人材育成セミナー
- 20日 「アジアゲートウェイとしての発展に向けた市場動向調査」第2回環境・エネルギーWG
- 20日 「沖縄21世紀国際交流基本戦略策定調査等委託業務」第2回有識者会議
- 20日 「沖縄県観光推進ロードマップ策定事業」第3回沖縄観光推進戦略会議
- 21日 「新産業創出基盤構築支援事業」ビッグデータセミナー
- 26日 「医療基盤活用型クラスター形成支援事業」第4回WG
- 27日 産学官交流サロン

賛助会員募集のご案内

当センターでは、地域産業の活性化や発展に寄与することを目的とした事業活動を推進するため、賛助会員を募集しております。ご賛同いただいた会員には、当財団の事業活動への優先的参加をはじめ、次のような特典をご用意しております。

■会員の特典

- 事業活動の公益的意義、研究活動等を通じて、産学官との交流に参加できます。
- 地域の活性化事業、産業創造等に参画でき、技術相談、斡旋等が受けられます。
- 財団が発行するニュースレター等定期刊物が無料で受けられます。
- 県内外の著名な研究者等とのネットワーク形成に参画する機会が得られます。

賛助会員の加入など
不明な点がございましたら、
お気軽にお問い合わせください!



<申込・お問合せ>

〒900-0015 那覇市久茂地3丁目15番9号
アルテビルディング那覇2階
一般財団法人
南西地域産業活性化センター 総務部
TEL (098) 866-4591 FAX (098) 869-0661



NANSEI SHOTO INDUSTRIAL ADVANCEMENT CENTER

【NIAC】とは

一般財団法人 南西地域産業活性化センター (Nansei shoto Industrial Advancement Center) の略称で、沖縄県と奄美群島の南西地域を拠点とする公益法人として昭和63年1月に設立されました。「南西地域のシンクタンク」として地域産業活性化の各種事業を行っています。平成23年4月1日に一般財団法人に移行しました。